國學院大學学術情報リポジトリ

手遊び歌実施時のテンポの揺らぎについて：人的環境としての保育者の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-04-11 キーワード (Ja): 手遊び歌, テンポ, 揺らぎ, 人的環境, 保育者 キーワード (En): 作成者: 中野, 圭祐 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000285

手遊び歌実施時のテンポの揺らぎについて
―人的環境としての保育者の視点から―

中野　圭祐

【要旨】

本研究では、保育者が保育中に手遊び歌を実施している場面で、手遊び歌のテンポがどのように変化しているのかに着目し調査、分析を行った。その結果、保育者は、手遊び歌の面白さのポイントを強調したり、面白い場面への期待感を高めたりする場面でテンポを遅くしたり、反対に早めたりするなど、子どもが手遊び歌を楽しみながら取り組めるような工夫をしていることが明らかになった。また、即興性のある手遊び歌では、保育者が手遊び歌の最中に間を取り、子どもたちとのやり取りを意図的に取り入れていることも明らかになった。また、子どもが取り組みやすいようにテンポを遅くする工夫も見られた。手遊び歌自体は楽譜が市販されていたり動画サイトで実演されたりしているが、その手遊び歌をどのように子どもに提供し楽しむかという点において、人的環境としての保育者の役割が大きく、子どもの実態に合わせた細やかな配慮をしながら実施しているということが明らかになった。

【キーワード】

手遊び歌　テンポ　揺らぎ　人的環境　保育者

１．はじめに

手遊び歌は、歌に手や指（時には手や指の延長としての身体も含む）の動きを伴った遊びであり、伝承的なわらべ歌や外国の遊び歌、童謡に振りをつけたものや創作の手遊びなど様々な種類がある。特別な道具や楽器などを必要とせずにどこでも取り入れることが可能であるため、保育の中でも多く取り入れられている。笠井ら（2015）による、保育士と幼稚園教諭を対象に行ったアンケート調査によれば、保育の中で手遊び歌を「よく歌う」と回答したのは80%「歌う」と回答したのは15%であり、両回答を合わせると95%の保育者が保育に手遊び歌を取り入れていることが報告されている。加えて笠井らは、手遊び歌が使われる場面についても調査をし、「保育活動前の導入として」が61%で、他にも「絵本を読む前」「絵本、紙芝居の前に集中させたり、気持ちを落ち着かせたりする時」「少しの空き時間」「誕生会などの行事の待ち時間」という意見もあり、これらを含めると83%が保育の導入として使用しているということを明らかにしている。

また、笠井らは、どの手遊び歌が多く取り入れられているのかについても明らかにしている。このように、どれだけの保育者が、いつ、どのような手遊び歌を行っているかは明らかになっているが、実際にはどのように実施されているのだろうか。

手遊び歌の実施について、堂本（2018）は、手遊び歌が、多くの場合メインの活動の「前座」となっていることの問題点を指摘し、音楽をともに楽しむという観点から手遊び歌をもっと見直すべきだと述べている。また、楽しくリズムに乗り、ドラマチックな展開を演出することで、楽しい音楽の時空間が生まれること、保育者と子どもが調子を合わせ、同調することにより、「いま＝ここ」にあるかけがえのない空間を作ることができる、とも述べている。

つまり、手遊び歌を保育者が実施する場面において、ただ単に活動の前座として扱われるのではなく、音楽的な楽しさを子どもとともに楽しむためには、手遊び歌について、その効果的な演出方法などの技術を身につけていく必要があると言える。

手遊び歌の実施方法など技術面に関する研究については、養成校における学生の取り組みに関する報告（渡邉（2013）、岩瀬（2017））は見受けられるものの、現職の保育者の実際の実施方法に関する研究は極めて少ない。岩瀬（2017）は、学生への指導の中で、表現の工夫の一つとしてアゴーギグなどのテンポの緩急を楽譜に示されているように表現することで手遊びが魅力的になることや、歌詞によって間を置いたり強弱を変えたりすることで子どもたちを惹きつけることができるなどの指導を行っている。

手遊び歌を保育者が子どもと共に行う場面では、保育者と子どもが対面し、同じ動きをしながら遊ぶことが多い。その際、保育者は手遊びを楽譜通りに忠実に表現しようとしているのか、または、保育者と子どもとの、その日その場での関係性の中で何かしらの工夫や変化が起きているのか。筆者は後者のように、保育者によって手遊びの実施方法が異なるのではないかと考える。特に、保育者は手遊び歌の実施の際に、岩瀬の示すように、歌の中で間を置いたり、テンポに揺らぎを起こしたり、という楽譜には表されていない工夫を行っているのではないかと考える。

なぜならば、手遊び歌を子どもの前で実施する保育者は、子どもたちにとって人的環境の一つであり、実施する保育者の実施方法により、その手遊びが子どもにとって豊かな体験になるかどうかが決定されてしまうからである。

以上のような点から、筆者は、音楽的表現の一つである手遊び歌が保育者によってどのように実施され表現されているのか、手遊び歌のテンポの揺らぎに着目して明らかにし、人的環境としての保育者の工夫や実施の際の配慮について考察していきたいと考える。

２．研究の方法

２−１　手遊び歌の定義

手遊び歌に関しては、明確な定義づけがなされておらず、手だけでなく、腕や足など全身に及ぶ動作が含まれているものや、言葉にわずかなリズムと抑揚がついているようなものも手遊び歌と表現されている。児嶋ら（2022）はそのような多様性を示した上で、手遊び歌を「大掛かりな場所の移動をせずに行う手指や全身の動きを伴う遊び歌」としている。本稿では保育者の歌のテンポに着目して分析を行うという趣旨から、児嶋らの定義に倣って研究を行う。

２-２　研究の対象及び期間

【調査対象】

東京都Ｔ幼稚園

４歳児クラスＡ組担任Ａ教諭（13年目）及び、同Ｂ組担任Ｂ教諭（１年目）、の２名を対象とした。

【調査期間】

Ａ教諭　令和５年４月16日から同７月10日まで　　計19場面

Ｂ教諭　令和５年５月２日から同７月５日まで　　計18場面

２-３　研究の方法

【調査場面】

保育時間中の一斉活動など幼児が集合した際に手遊び歌を行う場面

【調査方法】

保育室にビデオカメラを設置し、手遊び歌を行う場面で撮影を行った。その際筆者が録画できる場合は筆者が録画を行い、筆者が園に出向けない場合は、担任保育者自身が手遊び歌を行う直前に録画ボタンを押し、録画を行った。

録画データを元に、手遊び歌の実施の状況の分析を行った。まずは、手遊び歌を行った事例の中から、テンポに揺らぎがあったり間を取っていたりする場面を抽出した。次に、その揺らぎや間はどの程度であったかを分析した。

加えて、テンポの揺らぎのあった手遊びの動画を、手遊びを行った教諭自身に視聴してもらい、どのような意図があったのかについてインタビューを行った。

なお、本稿におけるテンポの「揺らぎ」とは、手遊び歌を実施する際に保育者が発した歌において、歌い初めから歌い終わりまでの間に、テンポに変化が起きることとする。また、「間」とは、「揺らぎ」の中でも、歌の途中に楽譜には表記されていない、何も声を発しない無言の時間が生まれたり、言葉のやり取りなどが挿入されたりすることとする。

２-４　倫理的配慮について

本調査にあたり、録画をした動画はデータ処理のためにのみ使用すること、それに伴い、本調査において対象となる教員・幼児らについての個人情報の保護、身体的、心理的リスクへの対応等について対象幼稚園に研究計画書を提示し説明を行い、対象となる教員本人が不利益を被ると判断した際には調査対象として取り上げないなど、了承を得た上で調査を行った。

３．調査結果

３−１　手遊びにおけるテンポの揺らぎの出現回数

調査を行った期間に行われた手遊びはＡ教諭が８曲19回、Ｂ教諭が10曲20回であった。その中で手遊び歌のテンポに揺らぎがあったものは、Ａ教諭が４曲６回、Ｂ教諭が４曲４回であった（表１）。

３−２　各教諭の手遊び歌におけるテンポの揺らぎ

ここでは、各教諭の手遊びにおいて、どのような揺らぎが見られたのか、そのテンポの変化に注目し、分析を行う。また、テンポに揺らぎがあったと判断したものについては各教諭から意図の聞き取りを行った。

表１．教諭ごとの手遊びの出現回数と揺らぎの有無

Ａ教諭			Ｂ教諭		
手遊び歌	回数	揺らぎ	手遊び歌	回数	揺らぎ
あおむしでたよ	2	2	あおむしでたよ	2	1
落ちた落ちた	8		棒が一本	1	1
あんパン食パン	2	1	クイズクイズ	1	
ペンギンマークの百貨店	1	1	落ちた落ちた	3	
じゃんけんホイホイ	1		こんなことできますか	2	
お弁当箱の歌	1		かみなりどんがやってきた	3	1
さかながはねて	2	2	忍法遊び	1	
お寺の和尚さん	2		あんパン食パン	5	1
			おんなじじゃんけん	1	
			お寺の和尚さん	1	

３−２−１　Ａ教諭の手遊歌びに見られるテンポの揺らぎ

①『あおむしでたよ』作詞・作曲不詳（図１）

Ａ教諭は、４月16日、４月17日の２回、『あおむしでたよ』を実施している。両手を握って合わせた状態から親指を立て、青虫に見立てる手遊びである。様々なバリエーションがあるが、Ａ教諭の場合、各指が「とうさんあおむし」から「あかちゃんあおむし」に対応して増えていく遊び方で実施していた。（図１のＢの部分が、１番であれば親指、２番であれば親指と人差し指、３番であれば親指と人差し指と中指、というように増えていく。そのため、１番よりも２番、３番、と、Ｂの小節は長くなる。）一般的な楽譜では指を立てる際の歌詞は「ピッ」となっているが、Ａ教諭は「ニョキ」にアレンジしていた。市販されている楽譜によっては『キャベツの中から』と題されることもある。

Ａ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「あおむしやちょうちょなど、季節に合っていて子どもにとって身近な題材であること」、「指先を使った面白さや手応え」を挙げている。

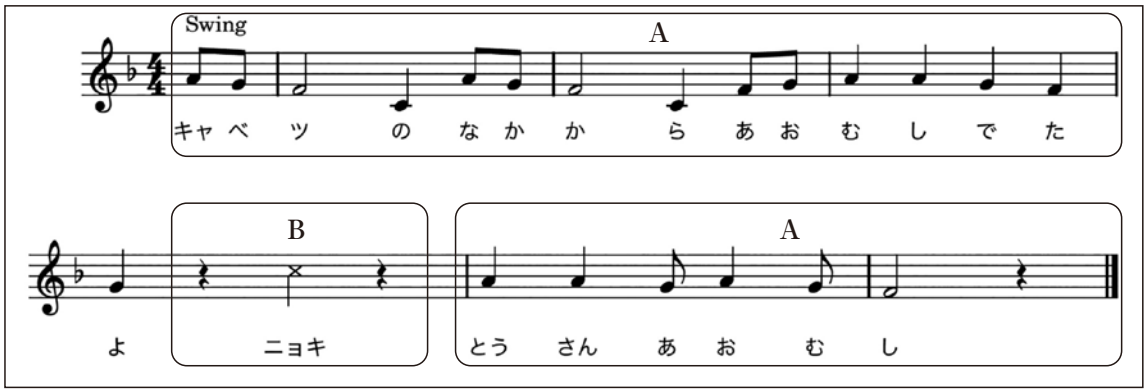

図１．Ａ教諭の『あおむしでたよ』（筆者書き起こし）

①－１　Ａ教諭４月16日

Ａ教諭の『あおむしでたよ』におけるテンポの揺らぎは主に、歌のパート（図１.Ａ）と指を立てるニョキのパート（図１.Ｂ）に分けられた。

全体では６番まで行い、どの回にもＢパートがＡパートに比べテンポが遅くなるという揺らぎが起きていた。１番から、２番、３番と進むに従って、Ｂパートのテンポは遅くなっていっていることもわかった。どこでどの程度の揺らぎが起きていたのかを表２にまとめた。（テンポはメトロノームによって計測を行いbpmで示したが、正確には計測できないためおおよその値で示すこととする。）

表２．Ａ教諭４月16日の『あおむしでたよ』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ	備考
１番	107bpm	80bpm	
２番	107bpm	72bpm	
３番	107bpm	53bpm	
４番	107bpm	60bpm	２秒間を取る
５番	107bpm	70bpm	
６番	107bpm	70bpm	最後にrit.あり

Ａ教諭に、それぞれのテンポの揺らぎに意図があったのか、あったとすればどのような意図があったのかの聞き取りを行ったところ、以下のような回答が得られた。

１番については、「お父さん青虫が出てくるところを強調したいという思いがあった」と述べている。２番以降についても同様に、「指を立てるところは、どの指が立っているのかがわかり

やすいように強調したいため、ゆっくりにしてしまう」と述べている。１番より２番、３番と、遅くなっていくことについては、「指をそれぞれ動かすことになり、４歳児の中には簡単に動かせる子どももいればそうでない子どももいるため、指が増えるほど難しいので遅くしている」と述べている。４番について、「ニョキ」の後に２秒ほどの間がある理由については、「手遊びの最中に子どもが声をかけてきたので、目で合図を送ったため間が開いてしまった。」と述べている。６番の最後にゆっくりになったことに関しては「最後なので終わったという雰囲気を作りたい」と述べている。

①－２　Ａ教諭４月17日

Ａ教諭が別の日に同じ手遊び歌を実施した際にも、①－１と同様にＢパートにおいてテンポが遅くなるという揺らぎが見られた（表３）。①－１と異なる点として、１番ではＡパートもＢパートもテンポ変化が見られなかった点である。４番のＢパートの終わりで間を取り、「これ難しいね」と声をかけている点も異なる。また、３番、４番のＢパートが70bpmであったのに対して５番は50bpmと、①－１と比較してかなり遅くなっている点も異なる。

表３．Ａ教諭４月17日の『あおむしでたよ』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ	備考
１番	120bpm	120bpm	
２番	120bpm	83bpm	
３番	120bpm	70bpm	
４番	120bpm	70bpm	途中声をかける
５番	120bpm	50bpm	
６番	120bpm	65bpm	

Ａ教諭は、①－２の１番でテンポ変化がないことについては、「前日に既に行った手遊び歌のため、最初はあえて印象付けのために遅くする必要はないと考えた」と述べている。４番で「これ難しいね」という言葉をかけたことについては、「前回の経験から、子ども達が薬指をつかうことを難しいと感じているような気がしていたのと、この日も難しそうにしている様子が見られたので、あえて声をかけた」と述べている。５番のＢパートが特に遅くなった点については、「子どもがこの手遊びに見通しを持っているため、５番で全ての指が揃うことがわかっており、全部揃うということに対する期待をより高めたかったためテンポを遅くした」と述べている。

②『あんぱんしょくぱん』作詞不詳　外国曲（図２）

Ａ教諭は、５月31日に『あんパン食パン』を実施している。一般的には『ぐーちょきぱーで』の手遊びで知られているメロディーの替え歌である。両手を握って「あんぱん」、親指と人差し

指をＬ字にして顎の両側に当てがい「食パン」、両手を握って胸の前でぐるぐる回した後に拍手をして「クリームパン」、顔を潰すように頬を両手で挟んで「サンドウィッチ」、両手で頭の上に輪を作って「ドーナツ」、ボールを握るような形にした両手を胸の前で互い違いに回転させて「クロワッサン」と見立てる手遊び歌である。

Ａ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「内容の面白さ（食べたパンは次の時には言わないというゲーム性、サンドウィッチの時に変な顔になる面白さ）」を挙げている。

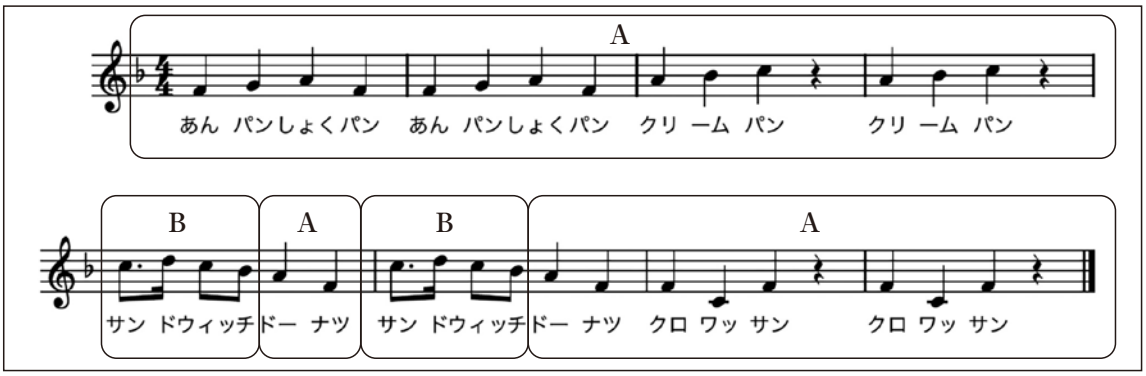

図２．Ａ教諭の『あんパン食パン』（筆者書き起こし）

この日、Ａ教諭は２回続けてこの手遊びを実施したが、１回目、図２のＢパートでテンポを遅くしている（表４）。また、２回目では、テンポを速めた。２回目についてはＡパートとＢパートでテンポの変化はなかった。

表４．Ａ教諭『あんパン食パン』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ
１回目	90bpm	80bpm
２回目	150bpm	150bpm

１回目、Ｂパートでテンポを遅くした理由についてＡ教諭は、「サンドウィッチ」の箇所は、顔が潰れて面白い顔になる点が1番の楽しさだと思うので、そこはみんなで面白がれるように長めに取っている」と述べている。２回目にテンポを早めた理由は「早くすることで難易度が上がり、変化をつけて別の面白さを感じられるようにした」と述べている。

③『ペンギンマークの百貨店』作詞・作曲／犬飼聖二（図３）

Ａ教諭は６月２日に『ペンギンマークの百貨店』を実施している。歌詞に合わせてペンギンの真似をしたり、「ドッキンドッキンワクワク」の箇所で両脇を開く動きをしたり、化粧をする真

似をしたり、おもちゃを探す真似をしたりして楽しむ手遊び歌である。

Ａ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「ある程度の長さのある手遊びも、意味やイメージがわかって楽しめるようになってきたと感じたから」と述べている。

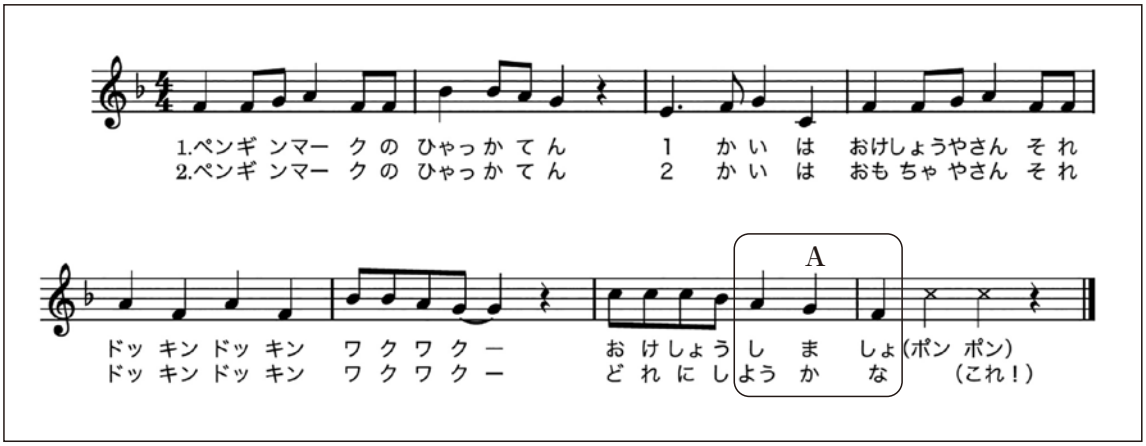

図３．『ペンギンマークの百貨店』（筆者書き起こし）

Ａ教諭は、この手遊び歌を実施する際、２番の最後の「どれにしようかな」の（図３．Ａ）の箇所で、リタルダンドをかけて子ども達を指差しながら見回し、その後、「な」でフェルマータをかけてさらに子ども達を見回しながら探す素振りをし、「これ」の場面で１人の子どもを指差す動きを行っていた。

これに関してＡ教諭は「これはこの箇所でどのおもちゃにしようか迷う場面なので、子ども達にとって誰を指差すのかドキドキする気持ちを高めたい」と述べていた。

④『さかながはねて』作詞・作曲／なかがわひろたか（図４）

Ａ教諭は６月21日に『さかながはねて』を実施している。魚に見立てて合わせた手のひらが様々な所に付き、それを何かに見立てることを楽しむ手遊びである。

Ａ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「プールの時期であったり、初夏から夏にかけての季節であったり、その時期にあった手遊びを取り入れたかった。」「前年のプールの時期にも取り入れていたので、その思い出やワクワク感を味わえるようにという意図があった。」と述べている。

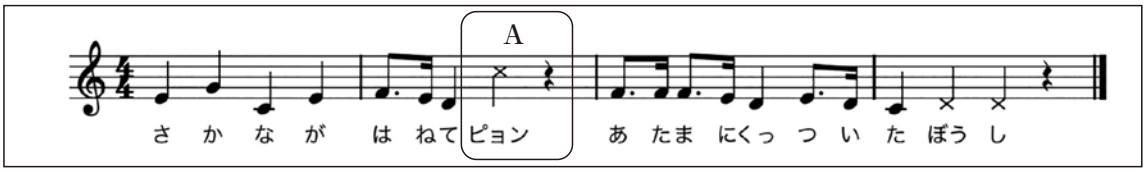

図４．『さかながはねて』（筆者書き起こし）

④－１　Ａ教諭６月21日

Ａ教諭はこの日２回この手遊びを行った。１回目は頭に付いて帽子、２回目は足に付いて靴であった。２回とも図４のＡの箇所でフェルマータをかけていた。

図４のＡにおいてフェルマータをかけた理由については、「『ピョーン』の間に、どこにいくのか、というワクワク感を高めたい」と述べていた。

④－２　Ａ教諭７月10日

Ａ教諭は７月10日にこの手遊びを10回繰り返している。降園前に集合する前の時間帯であり身支度をしている子どもが徐々に集まってきている場面であった。10回のうち、図４のＡの部分においてフェルマータがかかる場面とかからない場面が見られた（表５）。

１回目は④－１同様であった。２回目から３回目の間に、２人の子どもがＡ教諭の元に来て鞄のファスナーが閉まらないと訴えたり、鞄の中に空き箱で作った自分の荷物が入らないと訴えてきたりしたため、それに対応しながら手遊びを続けていた。７回目では、「ピョーン」の後に、「どこにいく？」と問いかけ、子どもが「お尻」と答えたため、「お尻にくっついた」と歌う。またその際、３人の子どもがＡ教諭に向かってお尻を突き出してくる。Ａ教諭はすぐに「パンツ」と言わずに間を取り、お尻を突き出してきた子どもに対して、パンツを指差すような動きをしながら面白がる姿を見せる。８回目は「ピョーン」の時点で子どもが「鼻」と言ったため、鼻に手を当てるが、Ａ教諭自身で何に変わるのかを決めずに、「何になる？」と子どもに問いかける場面が見られた。８回目は「鼻水」という回答であったため、「鼻水」で８回目が終わった後も、鼻水が出る動きや鼻をかむ真似をして、９回目に移行するまでに間を取っていた。９回目も同様に子どもが「眉毛」と言ったため眉毛に手を当てる。ここでも子どもに「なんだろう」と問いかけるが、子どもからは答えが出ず、最後の箇所を歌わずに10回目に移行する。10回目に移行した直後に、子どもが「冷えピタ[1)]」と言ったため、10回目は９回目と同じ「眉毛」を採用し、「冷えピタ」で終わった。

表５．Ａ教諭『さかながはねて』におけるテンポの変化

	フェルマータの有無	備考
１回目	有	
２回目	無	鞄のファスナーが閉まらない子どもの対応をしながら
３回目	無	鞄のファスナーが閉まらない子どもの対応をしながら
４回目	無	鞄に荷物が入らない子どもの対応をしながら
５回目	有	
６回目	有	
７回目	有	「どこにいく？」と子どもに問いかける・間を取る

８回目	有	「鼻」という声に応じて「鼻って何がある？」と尋ねる・間を取る
９回目	有	「眉毛」という声に応じて「何だろう」と尋ねる
10回目	無	

Ａ教諭は、１回目のフェルマータについては④－１と同様に、「ドキドキ感を高めたい」と述べていた。２～３回目についてフェルマータがなかったことに関しては、「おそらく、子どもの対応をしながら歌を歌っていたため、同時に別のことをしている時はフェルマータをかけるよりそのままのテンポで歌った方が歌いやすかったのかもしれない」と述べている。７回目以降は魚がどこに付くのか子どもに問いかけたり、パンツや鼻水で間を取っている点については、「子どもとのやりとりも取り入れて楽しみたい」と述べている。また、10回目にフェルマータを取らなかった点については、「10回目の開始時点で『冷えピタ』という声が子どもから上がったため、『まゆげについて冷えピタになる』ということが決まっていて、そのことを子どももわかっていて、楽しみにしていると判断したため、テンポを変えずにそのまま進めた」と述べている。

３-２-２　Ｂ教諭の手遊歌びに見られるテンポの揺らぎ

①『あおむしでたよ』（図５）

Ｂ教諭は５月２日に『あおむしでたよ』を実施している。Ａ教諭の行ったものと同様の手遊び歌であるが、アレンジが異なり、Ａ教諭が「ニョキ」と指を立てる際に両手の指を同時に立てていたのと異なり、「ニョキ、ニョキ」と言いながら両手の指を１本ずつ立てる（図５）。また、Ａ教諭が、親指、人差し指…と指が増えて行くのと異なり、１番であれば親指だけ、２番であれば人差し指だけ、というように、指は増えていかない。そのため、基本的にどの回も同じ長さで終わる。ただし、６番のみ、「ニョキ」の箇所で全ての指を１本ずつ立てていくため、10回「ニョキ」を行う。６番の最後に「ちょうちょになりました」と付け加えて終わる。

Ｂ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「年少組の頃から楽しんでいた手遊びなので、新しい担任（私）とも楽しめるようにしたかった。」と述べている。

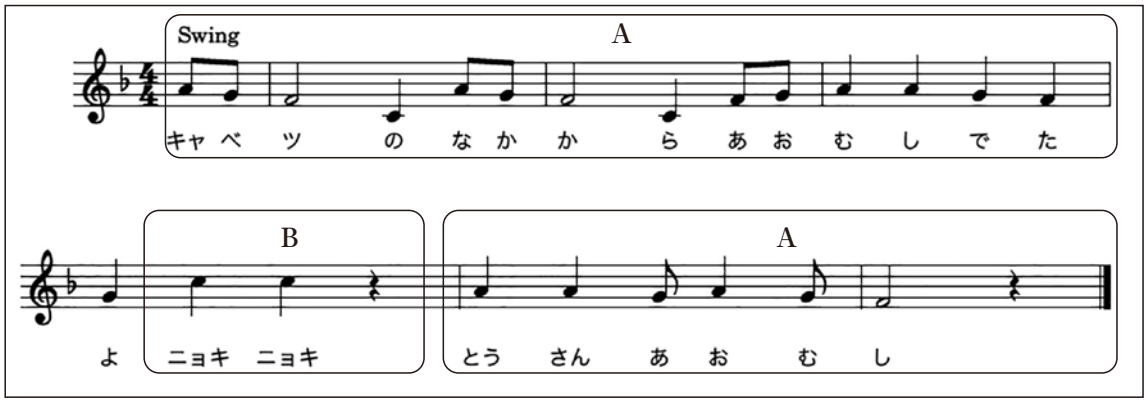

図５．Ｂ教諭の『あおむしでたよ』（筆者書き起こし）

Ｂ教諭は、この日６番まで実施した中でテンポの変化がある回とない回があった（表６）。１番においてＢパートでテンポが遅くなっていた。２番、３番は、テンポの変化がなかった。４番では、Ｂパートの後に約１秒の間を取っていた。６番において、Ｂパートで、親指から１本ずつ指を立てていく際に、最初は60bpm程度で始まり、10本目の小指までの間にアッチェレランドがかかり、120bpmまで加速した。更に最後の小指の「ニョキ」は「ニョキー」と伸ばしフェルマータをかけていた。６番は「ちょうちょになりました」で終わるが、その際には100bpmにテンポが落ちていた。

表６．Ｂ教諭『あおむしでたよ』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ	備考
１番	145bpm	115bpm	
２番	130bpm	130bpm	
３番	130bpm	130bpm	
４番	130bpm	130bpm	間を取る
５番	130bpm	130bpm	
６番	130bpm	60bpm→120bpm	フェルマータ
	最後のパートのみ100bpm		

Ｂ教諭は、１番でＢパートのテンポが遅くなった点について、「ニョキッと指が出る場面は見せ場でもあるので、「ため」を作りたいのかもしれないが、あまり意識をしていなかった。自分ではゆっくりにしていると思っていなかった」と述べている。４番でＢパートの後間を取った点については、「外で子どもの声がした気がしたので外を確認したら間ができてしまった」と述べている。６番でＢパートが60bpmから120bpmへと変化した点については、「指がどんどん出てくる面白さがある場面なので、最初はよく見てほしいという思いでゆっくりにした。そしてどん

どん出てくる楽しさが感じられるようにだんだん早くした。最後に蝶になるので、ニョキーと伸ばして印象が残るようにした」と述べている。曲の終わりでテンポを落とした点については、「最後はゆっくり終わることが多い」と述べていた。

②『ぼうがいっぽん』作者不詳（図６）

Ｂ教諭は５月８日に『ぼうがいっぽん』を実施している。保育者が「○○はどこだ」と歌った場所を子どもが両手の人差し指で指差すという、クイズのような楽しさのある手遊び歌である。

Ｂ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「話を始める前に子どもの注目を集めるため」と述べている。

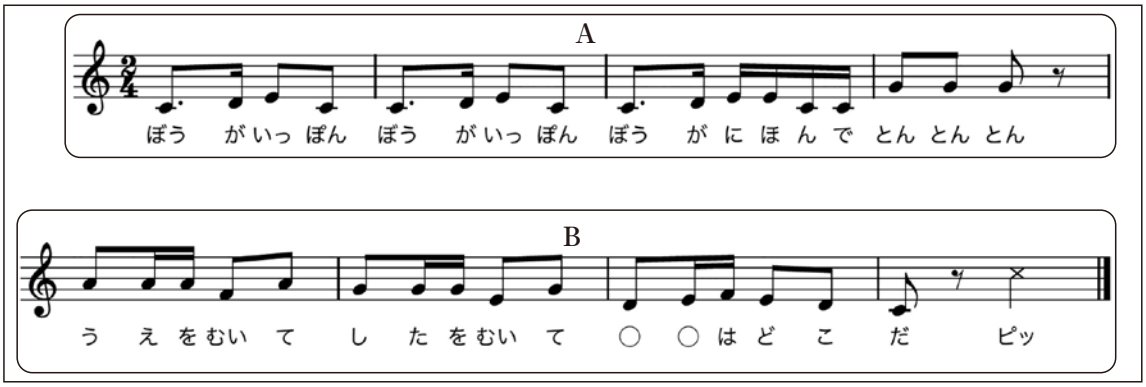

図６．『ぼうがいっぽん』（筆者書き起こし）

Ｂ教諭はこの日この手遊び歌を２回行い、２回ともにテンポの揺らぎが見られた（表７）。Ｂ教諭は１回目も２回目も図５のＡパートとＢパートでテンポに違があった。Ａパートの方がテンポが早く、Ｂパートで遅くなっていた。また、Ｂパートの「下を向いて」の「て」にフェルマータをかけ、間を取っていた。

表７．『ぼうがいっぽん』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ	備考
１番	95bpm	85bpm	フェルマータ
２番	100bpm	85bpm	フェルマータ

Ｂ教諭は、Ｂパートにおいてテンポが遅くなっている点について、「特に意図があるわけではなく、そういうものだと思って行っている」と述べている。また、「下を向いて」の箇所でフェルマータがかかっている点については、「何を指差すか考えている」と述べていた。

③『かみなりどんがやってきた』作詞／熊木たかひと　作曲／鈴木翼（図７）

Ｂ教諭は５月29日に『かみなりどんがやってきた』を実施している。後半に教師の「隠すのは」という声掛けののち、「○○」という言葉を聞いて、その部分を手で覆い隠す遊びで、クイズのような楽しさがある手遊び歌である。

Ｂ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「子どもが全員集まるまで、時間を調整しながら楽しい雰囲気を作りたかったから」と述べている。

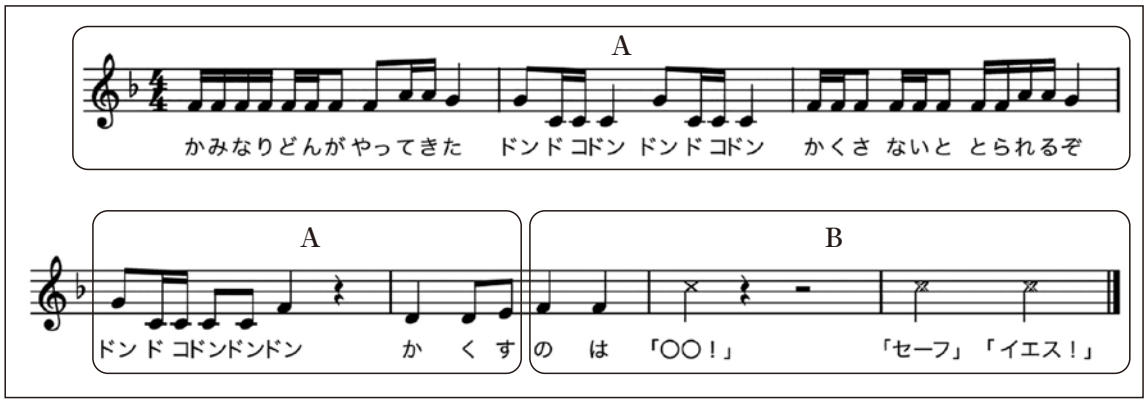

図７．『かみなりどんがやってきた』（筆者書き起こし）

Ｂ教諭は、この日この手遊び歌を３回行い、３回ともにおいてテンポの揺らぎが見られた（表８）。３回とも図５のＢパートにおいてテンポを遅くしていた。

表８．『かみなりどんがやってきた』におけるテンポの変化

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ
１回目	130bpm	100bpm
２回目	120bpm	100bpm
３回目	125bpm	100bpm

Ｂは、Ｂパートでテンポが遅くなっている点について、「特に意識をしていたわけではないが、どこを隠すかを伝える前なので、よく聞いてほしいという思いがあったのではないかと思う。以前別の教師がそのように行っていたのを見たので自分も同じようにしている」と述べていた。

④『あんぱんしょくぱん』作詞不詳　外国曲

Ｂ教諭は６月６日に『あんぱんしょくぱん』を実施している。Ａ教諭も３-２-１②において実施しているが、Ｂ教諭はアレンジを加えている。この日の場合、１回目、２回目は全ての歌詞を歌うが、３回目の前に、「あんぱん食べちゃおう」と言いながら食べる真似をし、３回目は歌詞

の中の「あんぱん」の箇所は歌わない、という遊び方である（図８）。

Ｂ教諭は、この手遊び歌を選択した意図として、「２クラス合同で集まる際に、Ａ教諭が度々行なっていたから」「Ｂ組の子どもたちも喜んでいたので、Ｂ組で集まった際にも取り入れた」と述べている。

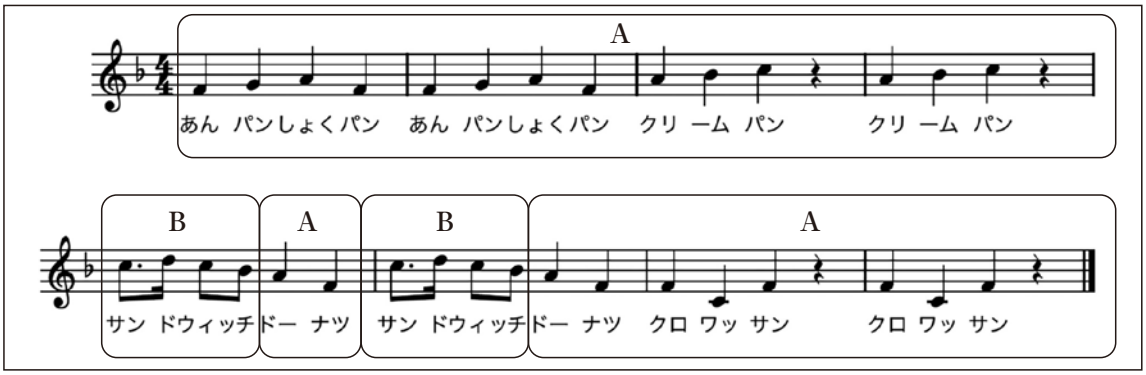

図８．Ｂ教諭の『あんぱん食パン』（筆者書き起こし）

Ｂ教諭はこの日３回実施した中で、どの回にもテンポの揺らぎが見られたが、１、２回目（表９）と３回目（表10）ではテンポの揺らぎが起こる箇所が異なっていた。１回目は、Ａ教諭同様、Ｂパートの「サンドウィッチ」の部分でテンポが遅くなっていた。２回目は、全体ではテンポは変化しなかったが、曲の最後の「クロワッサン」でテンポが遅くなっていた。３回目は、「あんぱん」の箇所のみを歌わないという遊び方で、その「あんぱん」の箇所だけテンポが遅くなっていた。また、３回目も、２回目同様最後の「クロワッサン」のテンポが遅くなっていた。

表９．Ｂ教諭『あんパン食パン』におけるテンポの変化①

	Ａパートのテンポ	Ｂパートのテンポ	備考
１番	96bpm	88bpm	
２番	100bpm	100bpm	最後のみ90bpm

表10．Ｂ教諭『あんパン食パン』におけるテンポの変化②

	あんぱん（無言）のテンポ	その他のテンポ	備考
３番	96bpm	104bpm	最後のみ98bpm

Ｂ教諭は、１回目にテンポの揺らぎがあった点について「特に意図していない」と述べていた。２回目にＡパートＢパートのテンポに違いがなかった点については「特に意図していない」と述べていた。２回目の最後の「クロワッサン」が遅くなっている点については「特に意図していない」と述べていた。３回目、無言の箇所でテンポが遅くなっている点については、「特に意図し

ていなかったが、無言の時に自分の顔を無表情にするように意識しているため、その止まった時間という感覚が、間を長く取ってしまっているのかもしれない」と述べていた。３回目の最後の部分でテンポが遅くなる点については、「特に意図していないが、手遊び全体の最後はゆっくりにする癖があるのかもしれない」と述べていた。

４．結果の考察

４−１　手遊び歌におけるテンポの揺らぎ

今回の調査では、表１に見られるように、調査期間中、Ａ教諭が８曲、Ｂ教諭が10曲の手遊び歌を実施しているが、その全てにおいてテンポの揺らぎが見られたわけではなく、テンポに揺らぎがあったものは、Ａ教諭で４曲、Ｂ教諭で４曲であった。両者を合わせてテンポに揺らぎのあった手遊び歌は、『あおむしでたよ』『あんパン食パン』『ペンギンマークの百貨店』『さかながはねて』『ぼうがいっぽん』『かみなりどんがやってきた』６種類であった。

この中で、『ペンギンマークの百貨店』『さかながはねて』『ぼうがいっぽん』『かみなりどんがやってきた』の４曲は、手遊び歌の中に歌詞が決まっていない箇所があり、保育者が即興的に決めたこと応じて子どもが反応することを楽しむ手遊び歌である。特にその保育者が決める箇所の直前にテンポが遅くなるという特徴が見られたことから、保育者が即興的に変化をさせる箇所のある手遊び歌では、テンポの揺らぎが起きることがあると考えられる。ただし、両者ともに実施された『落ちた落ちた』やＢ教諭の『こんなことできますか』も保育者が即興的に歌詞を変化させて楽しむ手遊びであることから、これは全てに当てはまるわけではなく、即興的な手遊び歌によってもテンポの揺らぎの起きやすいものとそうでないものがあるのだと考えられる。

また、『あおむしでたよ』は、指の動きを楽しむ手遊び歌であり、薬指だけを動かす箇所があるなど、子どもによっては難しさもありその難しさも面白さの一つであることから、指の動きを楽しむ手遊び歌においてテンポの揺らぎが起きることがあると考えられる。

『あんパン食パン』については、顔が潰れるという面白さや、歌う箇所と歌わない箇所を子どもが間違えずに歌う面白さなどがあり、その場面でテンポが遅くなるという特徴が見られたことから、手遊び歌の中の面白さのポイントではテンポが遅くなることがあると考えられる。

４−２　手遊び歌におけるテンポの揺らぎに対する保育者の意図

保育者への聞き取りにより、テンポの揺らぎのあった手遊び歌における保育者の意図についても明らかになった。Ａ教諭、Ｂ教諭それぞれへの聞き取りから、テンポの揺らぎに対してどのような意図があったのかをまとめたものが表11である。

Ａ教諭、Ｂ教諭共に「面白い場面の強調のため」や「面白さに対する期待を高めるため」「終わりの雰囲気を出すため」にテンポを遅くするという意図があることがわかる。逆に「難易度を上げるため」や「面白さの強調のために」テンポを速くするという意図もあることもわかった。

他にも、難しい場面をやりやすいように遅くしたり、それに慣れてきたのでテンポを変化させないようにしたりするなど、子どもがその手遊び歌をどのように楽しんでいるのかを把握してそれに合わせて同じ手遊び歌でもテンポを変える工夫を行っていることもわかった。

表11. 各教諭の手遊び歌におけるテンポの揺らぎの意図

手遊び歌におけるテンポの揺らぎの意図	A教諭	B教諭
面白い場面の強調のために遅くする	①－１、②	①、④
難しい場面をやりやすいように遅くする	①－１	
不足の事態が起きたときに手遊び自体をやめずに対応する	①－１	①
手遊びの終わりの雰囲気を出すために遅くする	①－１	④
慣れてきたのでテンポを変化させない	①－２	
面白さに対する期待を高めるために遅くする	①－２、③、④－１、④－２	③
難易度を上げるために全体を速くする	②	
面白さの強調のためにテンポを速くする		①
即興的に変えられる箇所を考えるため遅くする（なる）		②
他の保育者の方法を参考にして真似る		③
子どもの気持ちを言語化するため間を取る	①－２	
子どもとのやりとりのために問いかけをする間を取る	④－２	

また、両者とも手遊びの最中に子どもが直接話しかけてくるなどの突発的な出来事が起きたときに、手遊びを中断するのではなく続けようとしている場面が見られた。複数の子どもを相手に行うことの多い手遊び歌の最中には、予期せぬ出来事も起こる。その際に、目の前で一緒に楽しんでいる子どもたちの集中力や面白がっている気持ちを中断させないようにという工夫をしているということがわかる。

他にも、A教諭においては、手遊び歌の最中に、子どもの「難しい」という思いを言語化したり、子どもに問いかけをしたりするなど、敢えて間を取る場面も見られた。「難しい」という思いの言語化は、その手遊び歌の難しさ＝面白さ、につながる部分をA教諭が把握しており、さらにその箇所を子どもが難しいと感じていることをも読み取っているからこそ発されるものである。A教諭の手遊び歌への理解と子ども理解が、テンポの揺らぎとして現れた場面であると考えられる。またA教諭は、即興性のある手遊び歌に対して、A教諭自身が「お題」を決定するだけでなく、子どもとのやりとりの中でその「お題」を決定しながら実施していた。手遊び歌が保育者からの一方的なものではなく、その場にいる子どもたちの間で生まれる双方向的なものへと変化していることもわかる。

4-3　人的環境としての保育者

手遊び歌は楽譜やCDが市販されており、それを購入し知識を得て実施する場合もあれば、保育者の間で伝承されて実施する場合もある。また、近年では、インターネットの動画サイトから情報を得る保育者も増えている（児嶋、2011）。ただしそこには必ずこのように実施しなければならないというルールがあるわけではない。また反対に、動画サイトの通りに実施しておけば良いというものでもないだろう。実施の方法は保育者個人の判断による。同じ手遊び歌でもそれを楽譜通り、動画サイトの実演通りに行うだけではなく、保育者がその手遊び歌の面白さのポイントがどこにあるのかを理解し、その面白さを子どもと共有するために、アレンジの一つとしてテンポに揺らぎを起こしているのである。

保育教材としての「手遊び歌」はそれ自体が子どもにとっての環境の一部であるが、その手遊び歌を保育者がどのように実施するかによって、その手遊び歌が子どもにとって豊かな体験になるかどうかが左右される。手遊び歌の面白さのポイントはどこにあるのか、目の前の子どもは、今どのようにその手遊び歌を楽しもうとしているのか、それらを予め理解しておいたり瞬時に判断したりしながら保育者は手遊び歌を実施していることが明らかになった。つまり保育者は、手遊び歌を子どもに提供する人的環境として重要な役割を果たしていると言える。そうでなければ、手遊び歌としてCDの音楽を流しておいたり、動画サイトを視聴させたりすることで代用ができるということになってしまう。手遊び歌を子どもとつなぐ人的環境としての保育者が子どもの実態に合わせて意図的にテンポに揺らぎを持たせることは、堂本（2018）の言う「保育者と子どもが調子を合わせ、同調することにより、「いま＝ここ」にあるかけがえのない空間を作る」ことにつながると言えるだろう。

5．まとめ

本稿では、現職の保育者が手遊び歌をどのように実施しているのかの実態を探り、様々な手遊び歌の中でも、楽譜では表されていないテンポの揺らぎが起きていることを明らかにした。更に、そこには保育者なりの意図があり、その意図も子どもの立場に立った変化であったり、子どもが手遊び歌を楽しめるような工夫であったりすることが明らかになった。ほとんどの保育現場で手遊び歌が取り入れられているが、その手遊び歌を子どもが楽しむために、人的環境としての保育者としての立場を自覚することが保育の専門家としての保育者の役割であろう。

今回の調査では、A教諭、B教諭の２名の保育者の手遊び歌について考察を行ったが、A教諭がほぼ全てのテンポの揺らぎに対してその意図を語ることができたのに対し、B教諭にはテンポの揺らぎに対して「特に意図していないが」という回答が多くあったことが興味深い。A教諭は13年目のベテラン保育者であり、B教諭は１年目の新人保育者である。A教諭とB教諭の手遊び歌におけるテンポの揺らぎに対する意図の違いが、個人によるものなのか、経験によるものなのかについては今後の研究の課題としたい。

謝辞

本研究にあたり、貴重な保育実践の提供及び分析の承諾をいただきました東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎の先生方に心から感謝申し上げます。

【注】

１）ライオン株式会社から発売されている発熱時に頭部に貼る冷却シートの商品名

【参考文献】

阿部直美（2021）『０～５歳児　保育の手遊び』ひかりのくに株式会社

岩瀬由佳（2017）「学生が主体的に学ぶ就学前教育における手遊び歌・音楽遊び－小学校スタートカリキュラムでも使える遊び－」児童教育支援センター年報　第12号　pp.93-107

楽譜ストアPiascore『ペンギンマークの百貨店（初級編）』https://Bore.piascore.com/scores/125869　（令和５年10月25日取得）

笠井キミ子ほか（2015）「保育教育における手遊び歌についての一考察」中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要　第47号　pp.1-11

児島輝美（2021）「インターネットで配信される創作手遊び歌の変化について－保育教材としての検討－」徳島文理大学研究紀要　第102号　pp.53-66

児嶋輝美　釘宮貴子（2022）「保育現場における手遊びの伝承とその意味　－作者不詳の作品に見る手遊び歌の変遷－」徳島文理大学研究紀要　第104号　pp.43-54

田澤里喜（2019）『年齢別保育シリーズ　４歳児のあそび』ひかりのくに株式会社

堂本真実子編（2018）『保育内容　領域表現　日々わくわくを生きる子どもの表現』わかば社　p.67

森上史郎編（2017）『保育用語辞典』ミネルヴァ書房

渡邉寛智（2023）「学生の主体的な学びによる表現技術の習得プログラム1：音楽IA・IBにおける手遊び歌の発表を中心に」人間と文化　巻６　pp.13-22

（なかのけいすけ　國學院大學人間開発学部子ども支援学科助教）